奈良 いのちの電話

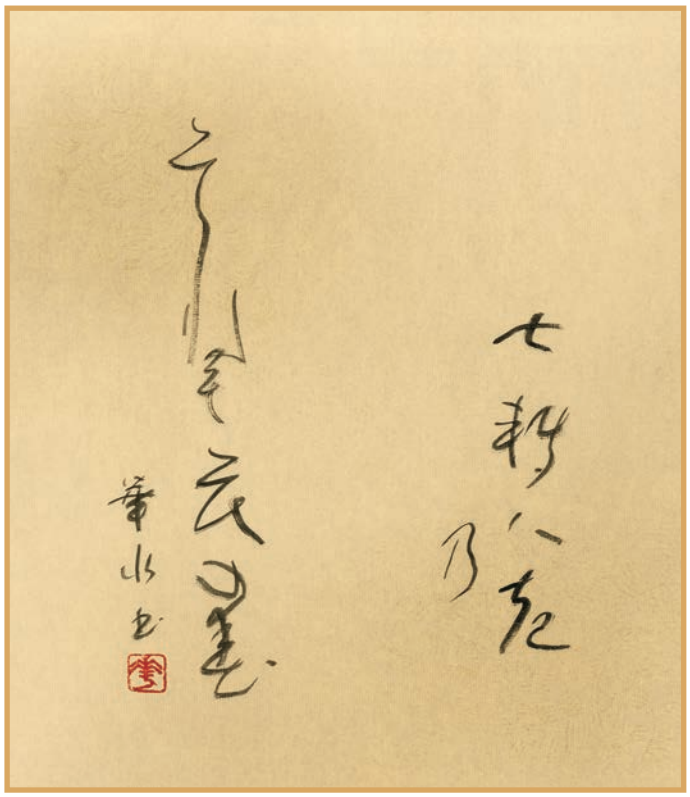
2014 新年

第355号

社会福祉法人　奈良いのちの電話協会
事務局／〒631-0816 奈良市西大寺本町8-27
TEL：0742-35-0500
FAX：0742-35-0533
e-mail：nid@amber.plala.or.jp

特集

突然の別れと悲しみからの再生　入江　杏 氏



七轉八起（ななころびやおき）の
それも花（はな）の春（はる）

内藤鳴雪の句

書・佐伯　華水

風鐸

平成26年の幕開け。
大和青垣から金色の朝日が昇ります。

新年の節目に「希望」とは何だろうかと考えてみました。新たな年は私たちに希望をもたらしてくれるのでしょうか？　しかし、辛い思い出は簡単に消えないし、苦しい生活は変えられません。苦しみを和らげ、幸せを広げることは難しいことです。しかし暗闇の中にあるからこそ光はありがたく、苦しみの中に希望を見いだす道のりこそが人生ともいわれます。

有名な建築家、安藤忠雄さんの作品に、この考えを形にしている作品があります。教会の十字架に自然の光を利用しているのです。コンクリートの壁を十字にくり抜き、外部からの光を室内に取り入れるアイデアです。自然光は日中しか入らない、だからこそ光で作る十字架はありがたく見えるのでしょう。十字の光が輝くのは晴れた日中に限られるからです。いつかこの教会に行ってみたいなと思います。

朝の来ない夜はない。小さな光をありがたいと感じながら、静かな一年であることを心から祈ります。（樹）

講 演

突然の別れと悲しみからの再生

―この悲しみの意味を知ることが出来るなら―

入江　杏 氏

昨年10月6日（日）、厚生労働省自殺防止対策補助事業として、奈良県社会福祉総合センターで、奈良いのちの電話の公開講演会が開かれた。

講師プロフィール

絵本作家。英国の大学で教鞭を執るなど10年に近い海外生活の後、帰国した2000年12月31日に「世田谷事件」に遭遇し、妹一家を失う。その後犯罪被害からの回復、自助とグリーフケアに取り組みながら、絵本創作と読み聞かせ活動に従事している。

2000年12月31日

その日の朝、大晦日なので私と母はおせち作りをしていました。イギリス出張帰りの夫は焼き鮭の朝食を食べていました。いつもと変わらぬ朝でした。ただ、いつもなら「おばあちゃんおはよう」と隣からやって来る、妹の子どものにいなちゃんとれい君が来ません。朝寝坊をしているのかと思いましたが、内線電話の応答もありません。母は「いくらなんでも」と言って、料理の途中で計量カップを手に持ったまま、隣の妹の家に行きました。20分ほどしてから母が血相を変えてもどってきました。「殺されちゃってる…」。何を言ってるのか意味がわかりませんでした。でも母のただならぬ様子に、夫と私と息子は妹の家に行きました。妹の家に入った時、やけに寒いなと思ったのを覚えています。一階は妹の夫のみきおさんの仕事場で、いつも書棚や机はきちんと片付いているのですが、その時は荒らされているという感じでした。本や書類や衣類の山が出来ていて、その上にひきだしが2、3個伏せて置かれていて、その下に人の足が見えていました。私が近づこうとした時、夫が「行くな。見るな。触るな。」と強く制止しました。わけがわからないまま、私と息子は家に戻り110番しました。救急車が来て、パトカーが来て、報道のヘリコプターが飛んできて、大変な騒ぎになりました。私たちはテレビを見て、救急の人の「死後何時間・・」という言葉で、妹家族の『死』を感じました。

生き残ってしまった

妹家族は、こんなことが起こるまではごく普通の「ただごとの毎日」を、一所懸命積み重ねてきた家族でした。「ただごとの力」を教えてくれたのが妹家族でした。また、家族の中心であった6歳のれい君の存在ゆえに「全（まった）きもの」となった家族の絆を感じさせてくれました。「全きもの」とは、ユングが「人生はその長さにかかわらずパーフェクトだ」と言った、「パーフェクト」を翻訳したものです。れい君はわずか6歳で人生を「全きもの」にしたと思いました。

私たちは二人姉妹です。妹はかわいくて天真爛漫で、私は傲慢にも「しっかりした姉」のつもりでした。みきおさんが失業したり、れい君に障害があったりして大変な時に、何か出来ると思い込んでいました。事件の時も、私に助けを求めたんだろうと思うと、隣にいたのになぜ妹を助けられなかったんだ、なぜ先に逝ってしまったんだ、私はなぜ生き残ってしまったんだ、という思いがありました。地域の治安が悪くなってきたので、引っ越さなくてはいけないと言いながら、なぜもっと早くに引っ越さなかったのだろう、とすべてのことに自責の念を覚えました。私は事件の後、津波にのみ込まれる夢を見るようになりました。そして、自死念慮の思いにとりつかれてしまいました。母もそうでした。その時、夫は半年間も仕事を休んで私たちに寄り添ってくれました。

私を変えた一枚の絵

私を変えた一枚の絵のお話をします。私が自死念慮に取りつかれながらも自死に至らなかったのは、一枚の絵のおかげです。お葬式の日、にいなちゃんのクラスの子どもたちが千羽鶴を持ってきて、歌を歌ってくれました。そのお礼と、子どもたちに怖い思いをさせてごめんなさいという気持ちを伝えるために学校へ行った時に、この絵をいただきました。2年生の国語の教科書に載っていた「スーホの白い馬」を読んで、一番心に残った場面を描くという課題でにいなちゃんが描いたもので、羊飼いのスーホが小さい子馬を抱きかかえている場面でした。

その後、私たち遺族は四十九日の法要や新盆や一周忌などの法話の中で、「全（まっと）うできなかった命」とか「冥福できない命」などの言葉に接するたびに辛い思いをしてきました。突然の

死に対して悼む言葉の貧しさを感じました。私たちに何が出来るだろうという思いの中で、しみじみ見てみようと思ったのがこの絵でした。この絵のシーンはスーホが傷ついた白い子馬を「放っておいたら狼に食べられて死ぬかもしれない。だから助けたんだよ」というシーンです。このお話は最後に白い馬が殺されてしまいます。何日も何日も嘆き悲しむスーホの夢の中に白い馬が出てきて、「そんなに悲しまないでください。それより私の骨や皮や筋や毛を使って楽器を作ってください。そうすれば私はいつでもあなたのそばにいられます。」と呼びかけます。それでスーホは『馬頭琴』という琴を作って人々の心を慰めるというモンゴルの民話です。

なぜにいなちゃんは、こんな悲しいお話を選んで絵として遺したのかと考えました。そしてこのお話が選ばれたのは偶然の符合ではなく、私に与えられた「道しるべ」ではないか、と思い至るようになりました。私もスーホのように妹たちの遺志を社会に繋げていけたらと思いました。私はにいなちゃんのお墓の前でこのお話を読みました。そうするとにいなちゃんが、私を死の淵から救ってくれたように感じました。その絵には黄色い被り物を着けた小さな羊飼いの女の子が描かれていて、それは亡くなる前日に、バンダナを頭に巻いて大掃除を手伝っていたにいなちゃんの姿と重なりました。にいなちゃんは、自分の姿を笑顔とともにこの絵の中に封じ込めたと思いました。そして絵の中から「死んじゃいけないよ。死んじゃいけない」と私に語りかけてくれたんだと気づきました。大好きな人を失った悲しみは消えないけれど、心の中でその人は生きていると私に呼びかけてくれています。これが、私の「生き直す力」となりました。

2010年に急死した夫が口癖のように言いました。「過去は変えられないけれど、過去の捉え方で、今と未来は変えられる。経験を乗り越えていこう」と。だから私も出来ることを尽くしていきたいと思います。

最後に、亡くなった妹家族に捧げる絵本『ずっとつながってるよ』の読み聞かせをして終わります。

講演を聴いて

講演が終わった後、私たち聴衆の胸の中には言いようのない重い感動が広がった。凄惨な事実とやり場のない怒りと悲しみを抱えて、それでも前を向いて歩いていこうとする入江さんの強く真摯な姿に、心を揺さぶられる思いだった。にいなちゃんとれい君が大好きだったぬいぐるみの小熊、ミシュカの目を通して家族の絆が語られる絵本『ずっとつながってるよ』の朗読を聴いていると、人の心のなかには、どんなことがあっても壊されないダイアモンドのようなものがあるということを、強く感じた。（M）

“自殺者3万人超え社会”のなかで考える

いのち ⑮

―「いのち」を輝かせる「思いやりの心」―

学校法人理事・前奈良市長
藤原　昭

私が初めて「いのち」と自ら向き合ったのは、半世紀前の大学生時代でした。人生「不可解」と立木に墨書を残し華厳の滝に投身自殺した藤村操の話を知った時です。ちょうど青年期の内省の時期で、衝撃を受けたことが今も脳裏に残っている。何故、生命をかけることが出来るのか。

その頃社会は、安保闘争から大学紛争、そして国民所得倍増計画から高度経済成長期に向けて大きく変わろうとしていた。私はその時代に社会人となり、初めての「いのち」との出会いでの思いは私の頭の中から薄らいでいき、社会との関係の中で「いのち」を考えるように変わっていったと思います。

人生「不可解」は考えれば当たり前のことであり、自分の中だけ閉じこもって生きる意味を探しても見つからない。他人とともに生きている、他人のために生きている中で人生の生きる意味は見いだせる。

「いのち」とは「生きる」ことなのだと実感する。

最近の想像を超えた殺伐とした事件や自殺の増加を見る時、信じられないほど「いのち」の軽い時代、「生きる」ことを粗末にする時代になったと思える。その背景には様々な社会的状況や事象があるが、根源の所で「いのち」を守り「生きる」ための人と人との良い関係が壊れかけているからではないでしょうか。心の触れ合う安心感、心にしみる親切、元気を与えてくれた言葉、やさしい心遣い、助け合いの精神、謙虚な態度等々、人と人の互いの「思いやりの心」が人間社会の基本ではないでしょうか。

「思いやり」とは、相手の立場に立って考え、相手の気持ちを大事にして、その上で自らの判断で発言や行動することです。幸いにして、これは日本人が日常の生活や文化の中で、昔から大切にしてきた「心」です。最近の災害地への多くのボランティア活動にも、日本人の思いやりの心を見ます。一人一人が心にかけて実践していけば、少なくともどこかで理解しあえる暖かい人間関係、そして人間社会が生まれるでしょう。このことが、「いのち」を守り、輝かせます。

「思いやりの心」は、言葉で、態度で、表情で、行動で伝わります。そして今、将来を担う子供たちに学校において「思いやりの心」を育みそして伝え合う多様な学修がすすめられることを期待したい。（当協会役員）